教師間での「協働」を取り入れた授業実践の考察

― 授業後の「振り返り」を共有して―

中西　善之

金沢大学大学院教職実践研究科　学習デザインコース

【概要】

2017 年度、教職大学院で多くの学校や教育関係機関に訪れる機会に恵まれた。その体験を通じて、多様な価値観や新たなる価値観に気付くことができた。それは、一人ではなく多くの仲間と共に「振り返る」ことが出来たからこそ、気付くことができたのであろう。私は、教師間での授業後の「振り返り」を通じた「協働」を授業実践に取り入れることで、相互に考え方や行動に影響を与えながら成長できるのではないかと考え実践してきた。この「協働」を実現するために、授業後の「どうでしたか？」という声掛けを行うことや疑問点や悩みを自由に語ることができる場を作って話し合いを重ねてきた。その結果、話し合いでは、悩みや疑問点だけではなく、授業創りにおける様々な思いや考え（価値観）を伝えあうようになり、教師間での「協働」を取り入れた授業実践が、お互いの考え方や行動に大きな影響を与え、成長できる活動となることが分かった。

Ⅰ　はじめに

2017 年度より金沢大学教職大学院で学ぶ機会に恵まれ、石川県内外の小中高等学校や教育関係機関に訪れる機会が多くあった。県内では、能登地域にある小中学校、県外では、島根県立隠岐島前高等学校など普段見ることができない多くの学校や教育関係機関に足を運ぶことができた。その現場で、働く先生方や職員との話しから、多くの事を肌で感じ体験することができた。全てが新鮮で、今まで見たことがなかった景色を見た感覚に陥ったことを今でも鮮明に覚えている。

能登地域の小中学校では、多くの初めてに出会った。それは、「複式学級」や能登の魅力でもある地域資源を学びの場として活用し、更にそこで活躍する人を「ゲストティーチャー」として招く授業実践である。島根県では「島根県隠岐島教育魅力プロジェクト」を視察することができた。それは、隠岐島前高等学校の魅力を上げることで、島の人口流出を防ぐというプロジェクトであった。そこでは行政・学校・地域がこの島を守るために協働し、生徒が行きたくなる、親が行かせたくなる、地域が活かしたくなる学校となるように取り組んでいた。例えば、現在、日本が抱える最重要課題として、財政難、高齢社会があげられる。隠岐島は、これらの課題が最も深刻な地域である。だからこそ日本の最重要課題に対しての最先端の学びができる場であると視点を変え、行政・学校・地域が連携することによって島全体を生徒たちの課題解決型学習のフィールドにつくりかえていた。

私はこれらの視察を通じて一つの事に気付いた。それは、仲間と共に視察を体験できたからこそ様々な気付きがあったのではないかと言うことだ。教職大学院で共に学ぶ仲間は学卒院生、特別支援学校教諭、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭という様々な立場の学生や現職教員が在籍している。そして、勤務地も石川県内の能登地域から加賀地域の学校で勤務しており、育った地域や年齢、教職歴、学びの履歴も違うからこ

そ視察後の振り返りでは、様々な視点で話し合うことができ、学びを深めることができたのではないか。実際に視察後の「振り返り」では、共通の体験を通して、それぞれがこれまでの実践と照らし合わせながら、感じたこと考えたこと、そして今後の教育の在り方や可能性についてまで話し合うことができた。この体験を通して、私自身が常識と考えていた事に対しても「なぜ？」と吟味することにもなった。つまり、私は視察後の仲間たちとの振り返りを通じて、協働の価値に気付かせてもらったのではないかと考える。

「協働」に関して、坂本（2018）は「一般的な「collaboration」としての「協働」とは、自らが属する組織や文化の異なる他者と一つの目標に向けて互いにパートナーとして共に働くことである」と述べている。私は、この考えをベースに協働とは「異なる背景を持つ者が、共通の目標に向かう際に自分の思いや考え（価値観）を伝えあい、お互いの考え方や行動にも大きな影響を与え成長できる活動」と定義する。

協働の価値については、更に授業創りでも体験することができた。それは、金沢大学附属高等学校での学校実習Ｉである。この実習で、始めて教育実習生の指導を担当した。そこで金沢大学附属高等学校教諭、教育実習生と私の三者で授業づくりについて様々な議論を重ねることができた。特に議論を重ねたことは２点ある。１点目は授業中の発問である。発問と言っても多くの配慮すべきことがある。そのことを教育実習生に伝えるためには、言語化する必要があり、自然と私自身の実践を見つめ直す機会となった。２点目は、生徒のつぶやきの価値である。教師の発問で生徒の思考を揺さぶることも大切だが、生徒のつぶやきを教師が拾い教室全体へと広げていくことが、議論に入りにくい生徒も自然に巻き込める手段の１つではないかと話し合う中で、新たに気付くことができた。

このように、三者での授業創り及び授業整理会での協働を通して、自分自身の授業実践を見つめ直すきっかけとなった。それは、今まで感覚的に行っていたことを言語化することで明確になったり、他者の授業実践を私自身の授業実践と照らし合わせながら見たりすることで、新たな気付きにつながった。私はこのような気付きが得られたのも、背景の違う者同士が授業創りというものを通じて「協働」できたからではないかと考える。

現在、子どもたちの現状や課題を踏まえつつ、2030 年とその先の社会の在り方を見据え、以下のような在り方が考えられている。それは、「他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深められる」こと。更に「集団としての考えを発展できる」ことや、「他者への思いやりを持って多様な人々と協働できる」ことが求められている。そして、「変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていく」ことも求められている。私は、この文言を活字だけではなく、リアルに肌で感じる体験ができた。それと同時に、生徒たちと向き合っている私たち教師こそが、「協働」する中で、「試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造すると同時に新たな問題の発見・解決につなげていく」取り組みをしなければいけないと考えるようになった。

２.石川県立金沢西高等学校での実践に向けて

私は所属する石川県立金沢西高等学校で、地歴公民科の科目「現代社会」を担当する教師間での、授業後の「振り返り」を通じて「協働」できる話し合いの場を作りたいと考えた。それは、その場で「協働」しながら授業を創り、実践することが、お互いの考え方や行動に大きな影響を与え、成長できる活動になると考えたからだ。

Ⅱ　実践

１．教師間での授業を「振り返る」大切さ

「協働」を取り入れた授業実践をするにあたり目に見えない部分として、心がけたことがある。それは、2017 年の 7 月 3 日に行われた石川県能登町役場にて北陸大学藤岡信二准教授の「教育を核とした地域活性化」講演会を聴講し、ある考え方を知ることになったからだ。藤岡氏は、今求められているリーダーシップとして「サーバント・リーダーシップ」という考え方を紹介してくれた。「サーバント・リーダーシップ」とは、元 AT&T（アメリカ電話電信会社）のロバート・K・グリーンリーフが提唱したリーダーシップである。それは、「私（リーダー）にできることは、改革の原動力となる仲間をサーバント（奉仕）して支え、ゴールに導いていくこと」である。この考えは、一方的にグイグイ引っ張るリーダー論ではなく、人が集まって何かをしようとする時に誰かがごく自然な振る舞いで、共通の目的を達成するためにみんなの行動をまとめたり、進む方向を示したりするイメージである。このイメージこそが、「協働」するうえで、大切な視点になると考えた。また、2017 年度に行った教職大学院の仲間との視察の体験から、「振り返り」が「協働」するうえで重要になると気付いた。

私は、教師間での「協働」を取り入れた授業実践をするには以下のステップを踏む必要があると考え取り組んできた。第一に授業後の「振り返り」を通じて、私が担当教員と悩みや疑問点等を共有すること。第二に、「振り返り」で悩みや疑問点などが出てきた時は教科会ではなく、インフォーマルな時間制限なしの場を設定して「話し合う」こと。第三に、その話し合いでは、先生方が喋りやすい様に、今抱えている悩みや疑問点から話し合うことにした。それは、悩みや疑問点を抱えるということは、理想の授業像があり、そのギャップから悩みや疑問点が生まれると考えているからだ。悩みや疑問点等から話し合うことは、必然的に授業創りに関する意見も出るようになり、学び合う場になっていくのではないかと考えたからだ

2.「協働」を取り入れた授業実践に向けて

(1)高等学校　地歴公民科教科会の実態

地歴公民科の教員が、一堂に集まり議論することができるのは教科会である。しかし、私が経験してきた過去の教科会では、教科主任からの予定確認や成績確認等の報告・伝達に多くの時間が費やされてきた。このような会では、各科目担当者間で進度の話し合いがあったとしても、語弊があるかもしれないが授業内容について議論し、授業を創り合う為の意見を出し合い、学び合う場の要素は少ないのが現状である。

(2)「振り返り」、「話し合い」で気を付けたこと

本校では、科目「現代社会」を以下の 3 名で担当している。また、1 年生 8 クラスの 320 名が科目「現代社会」を履修している。

教員 A　：20 代講師
教員 B　：40 代教諭
私　　：30 代教諭

私は「協働」する為に授業後の「振り返り」で大切にしてきたことが一つある。それは授業後、職員室で手に付いたチョークの汚れを洗っている時に投げかける自然な「(授業）どうでしたか？」という振り返りの声掛けである。この何気ない日々の声掛けが、「協働」する上での土台作りになると考え実践してきた。そして担当教員が、授業実践に対する悩みや疑問を抱えていると感じられた時に担当者間での話し合いを呼び掛けるようにした。また、第二の話し合いの場で大切にしことは特定の授業形態や展開を一方的に推し進めていかないことだ。教師には一人ひとり異なる教師の履歴がある。特定の授業形態を強調し採用してしまえば、その多様性を無視し

教師の授業創りにおいての創造性の部分を消しかねないと考えたからだ。

3.「協働」を取り入れた授業実践

(1)「振り返り」、「話し合い」の始まり

始業式前に現代社会を担当する先生方に声をかけ、初めて集まることにった。そこでは、今年度の授業内容や進度確認から、本校生徒の実態を話し合う中で、現代社会の授業で何を教えるべきなのか、そもそも高等学校、学校での授業はどうあるべきなのか等、多様な話へと広がっていった。そのように広がっていく契機となったのは、私が投げかけた、第１回目の授業ガイダンス内容についての相談だった。私自身が悩みや疑問点を包み隠さず自己開示することで、全員が同じ目線で授業に対する様々な思いを自由に語れる場になれるのではないかと思い投げかけた。

この話し合いで、「良い授業とは、何か？」を授業ガイダンスで生徒と共に考えても面白いのではないかということになった。また、現代社会の授業では、教師が作成したプリントの穴埋めを一方的に説明する授業からの脱却を目指そうという日々の実践への思いや科目「現代社会」の目標まで再確認することとなった。それは、社会的事象を知る・理解するから、その社会的事象に対して自分自身はどう向き合うのかを問うことが大切であるということ。そして、そのような社会的事象を知り、理解したからこそ、どのように行動し生きるのかが重要なのではないかということだ。

(2)授業実践①

授業ガイダンス

ねらい：教師と共に「良い授業とは何か」を考え、多様な意見に触れる。
生徒自身も授業の傍観者ではなく授業を創り上げる一員となる意識を持つ。

現代社会の第１回目の授業ガイダンスでは、事前の担当者間での話し合いにも出てきた良い授業とは何か、という課題に対して生徒と共に考えることにした。具体的には、今まで経験してきた中学校時代の社会科授業の良かった所の振り返りを通して考えてもらうことにした。私は、教室の座席をコの字型にすることによって、お互いの顔が見える状態にし、可能な限り指名せず、皆がつぶやけるように隣の人と喋る時間を意図的に作った。そして、その言葉を私が拾い、全体につなげていけるように取り組んだ。この授業を通じて、多くの生徒が抱いている社会科の授業は教師が一方的に喋り、生徒は、ひたすらノートに写し、それを暗記することが社会科の学びという勘違いを少しでも崩したかった。

生徒からは、良い授業に関して「分かりやすい説明」や「なぜ、それが起きたのかを教えてくれた」や「テスト前に先生がまとめプリントをくれる」などの意見があがった。そんな中、その意見と真逆の「まとめを自分で考えていた」ことを良い授業にあげている声が聞こえた。私としては、期待していた意見であり、そのつぶやきを拾い、皆に投げかけることにした。「まとめを自分で考えることを良かった点に挙げている人もいるみたいやね。」と全体に投げかけた。そして、少し間を置いた後に「社会科の授業って覚えることが一番大切なのかな？」、「先生がわかりやすく、まとめてあげることが良い授業なのかな？」と連続して投げかけた。また、「学校でしかできない学びって何かな？」と投げかけた。

授業の最後には、これから学ぶ「現代社会」の特徴を私が一方的に説明するのではなく、生徒にキーワードだけでもいいので自由につぶやかせることにした。そうすると、少子高齢化という語句が出るとそれに関連した「伝統工芸の跡継ぎ問題もある」、「晩婚化も問題なんじゃない？」と関連する話しをしてくれたり、「最近は、成果や結果ばかり見られる」と言う話しが

出れば、それを表す「成果主義やね」とキーワードをつぶやいてくれたりした。1 つのキーワードが出れば関連する話しをつぶやいてくれたり、それとは逆に１つの話しからそれを表すキーワードをつぶやいてくれたりする生徒がいた。(以下、授業後の生徒の振り返り一部抜粋)

- 私が良い所と考えていたことが、他者は悪い所と捉えている所にびっくりした。
- まとめを先生に書いてもらっていたが、実はその部分を自分たちが書けばとても力がつくのではないか。
- みんなで話し合っているだけなのにどんどん大切なこととなる意見が出てきて、まじめにノートをとる授業だけが良いものではないと思った。
- 色々な考えを持っている人がいて、とても面白い。それを共有できる授業っていいな。
- 先生の話を聞くことだけが授業だと思っていたけど、自分たちでも授業は創り上げることができるのかなと思った。

【資料１】

教師間での振り返り

授業後、職員室にて第１回目の授業ガイダンスで良い授業とは何かという課題に取り組んだ先生方と授業の振り返りを共有した。生徒からあがった意見として一番多かったのは「分かりやすい授業」という意見だった。それは、概ねどこのクラスも一緒だったようだ。私たちは、分かりやすい授業とは、「考える必要性がない授業なのではないか」とか、「実は分かりにくい授業の方が良いのではないか」など疑問点について話し合った。また、生徒の振り返りを次の授業の導入に活用することが、生徒の興味関心を更に引き付けることになることや生徒と共に創る授業になっていくのではないかとも話し合った。

更に、次の単元「私たちの生きる社会」で扱う現代社会の諸課題では、できるだけリアルな文脈の中で当事者意識を持たせられる課題を扱いたいと確認した。また、課題の提示の仕方に関しては、生徒と教師にとって身近な課題から日本、世界の課題にステップを踏むことで生徒は社会的事象を自分事と捉えられるようになるのではないかとも話し合った。

(3)授業実践②

単元　　：私たちの生きる社会

ねらい　：現代社会における諸課題を扱う中で、社会の在り方を考察する基盤として、幸福、正義、公正などについて理解させるとともに、現代社会に対する関心を高め、いかに生きるのかを主体的に考察することの大切さを自覚させる。

授業内容：新聞記事（「担任、息子の入学式へ…高校教諭勤務先を欠席、教育長が異例の注意」）を活用し、現代社会の諸課題をとらえるために必要な「幸福、正義、公正」の３つの視点で捉える。

この単元では、「現代の諸課題を捉える枠組み」である「幸福・正義・公正」を学ぶ。私は、あえて学習指導要領で示されている「生命、環境、情報など」を扱うという、この「など」である題材を先に設定した。それは、第１回目の授業後の担当の先生方との話し合いが後押ししてくれた。高等学校に入学して間もない生徒に「入学式」を題材としたものを扱うことは興味関心を抱きやすく自分事と考えられるのではないか。そして、私（私の子どもの小学校入学式と金沢西高等学校の入学式が同じ日）のリアルな課題でもあり教師と生徒が共に考えられる課題ではないかと思い実践した。まずは、個人で新聞記事を読み、自分自身がこの担任の先生なら「息子の入学式」、「勤務校の入学式」どちらに参加するべきかを考えさせた。その後、隣の友だちと意見交換し、クラス全体への議論へと展開していくように、生徒のつぶやきを拾い、私が全体に投げかけていく形で議論は進んでいった。

授業を進めていく中で、資料２の A「息子の入学式は一生に一度だけだから」と意見が出た瞬間に、ある生徒から「それは勤務校の生徒も一緒」や C「先生という仕事に就くときにそれ

を理解して就職したのでは？」という意見がでると、「私たちも金沢西高校の行事など知らんやろ？」など、自分の立場と置き換えてみたりしながら対話が進んでいった。D「仕事よりも私事を優先してよいのか？」に関して、この意見が出てきた時、ある生徒が「厳しいな～」と発言した。だから「今、過労死になるんじゃないか」等の意見も出てきた。多くの意見が出た所で、現代の諸課題を捉える枠組みである「幸福・正義・公正」について確認しながら、対立する両者の思いを汲み取った解決策を議論した。また、議論の際に出てきた B「年次有給休暇」や「過労死」なども科目「現代社会」で扱う内容であることを確認した。現代の社会の課題について話し合う中で、出てきたこのキーワードこそが科目「現代社会」でも重要になることを話した。教科書に出ているから重要ではなく、現代の社会で問題になっているから重要なのであると意識付けて終わった。

（授業中に板書した内容一部抜粋）

息子の入学式に参加すべき

- 自分の息子の A **一生に一度だけだから**
- 他の親も休んでいる
- 休暇を取ってもいい権利ある **B（年次有給休暇）**
- 勤務校に休暇届を提出済み（学校受理）
- 他人の子どもの入学式だから、自分の子を優先

勤務校の入学式に参加すべき

- 他人の人生を預かっている（責任が重い）
- **C 先生という仕事に就くときに分からなかったのか？**
- **D 仕事よりも私事を優先していいのか？**
- 初めてのあいさつの場
- 新入生の担任という立場 **（変わりがきかない）**

【資料２】

（以下、授業後の生徒の振り返り抜粋）

- 息子の入学式と勤務校の入学式でどちらが大切なのかを決めることは不可能だと思った。対立するのはお互いの幸福を望むからであり、その思いを世の中がどのように受け止めていくべきかを考えるべきだ。
- どの立場に立つかによって意見が全然違ってくる。
- 何が正しいかを考えると多い意見の方が強くなってしまう。

【資料３】

教師間での振り返り

授業後、私の感覚では、まだまだ生徒は、提示した課題を他人ごとのように捉えているように感じたことを皆に相談した。生徒にとって更に身近で且つ当事者意識が持てる課題がないかを話し合った。そこで、今世間で叫ばれている働き方改革に関連させて、「教師と部活動」という題材の方がもっとリアルに考えられる課題ではないのかという話しになった。つまり「教師は家庭と部活動のどちらを優先すべきか？」など、皆にとって今抱えるリアルな課題を通して、考えてみてはどうかなど様々な意見が出てきた。

次の授業で扱う生命倫理では、生徒にとって興味関心の高いテーマが多く、教師が一方的に羅列的に説明していくのではなく、生徒自身が興味関心があるところを勉強させた方が良いのではないかと意見が出てきた。そこで、私はクラスごとにアンケートを取り集計して、そのクラスで扱うテーマを決定した。アンケートの結果により、出生前診断や尊厳死など生と死に関する内容に興味関心を示していることが分かった。そこで、「生」に関しては、出生前診断を扱い、「死」に関しては、安楽死、尊厳死を中心に扱うことにした。他の先生方は、担当者間での話し合いから、生徒個人が興味をもったテーマに対して資料集を使い調べ、皆の前で発表する授業形態をとった。

(4) 授業実践③

単元　　：私たちの生きる社会

ねらい　：現代社会における諸課題を扱う中で、社会の在り方を考察する基盤として、幸福、正義、公正などについて理解させるとともに、現代社会に対する関心を高め、いかに生きるかを主体的に考察することの大切さを自覚させる。

授業内容　：生命倫理に関する新聞記事（「新出生前診断　県内病院でも」）を提示

し、現代社会の諸課題をとらえるために必要な「幸福、正義、公正」の３つの視点で捉える。また、技術の進歩による生命観の揺らぎについても考察する。

まずは、新聞記事から石川県内の病院でも始まった新出生前診断の診断方法や、その診断で分かる病、診断できる条件、診断費用を読み取りまとめさせた。その後、新出生前診断のメリット、デメリットを考えさせた後、実際に出生前診断を受け、わが子がダウン症であると分かり、出産した家族のドキュメンタリー番組を見た。そして、「あなたは、出生前診断に賛成か反対か」を皆で話し合った。この時の生徒の一言が今も心に残っている。「先生！賛成、反対という次元ではなく、この技術は科学者の興味関心や、求める人がいる限り進んでいくんじゃない。だからこそ、出生前診断を受けた人、受けなかった人への配慮をどう考えていくかを社会が考えるべきなのではないか」と述べてくれた。自分自身の実践がズレていたのではないかと他の担当教員に相談した。

終末期医療・治療態度の問題である「安楽死」、「尊厳死」に対しては、海外の考え方や安楽死が合法の国での安楽死を受け入れた人のコメント等の資料を紹介しながら、死生観の違いや、技術の進歩による生命観の揺らぎを投げかけながら授業を終えた。

（以下、授業後の振り返り一部抜粋）

- 出生前診断の所では、生と死はかけ離れているように見えて実は近いものなんだと思った。
- 尊厳死について、私の祖父は最後、抗がん剤治療をやめて亡くなった。その事と、今回の授業を受けて、私は尊厳死についてもっと国全体で考えるべきだと思った。抗がん剤治療をやめて欲しいと言ったのは本人なのかどうかは知らないが、もし、家族の了解だけで行ったのならば倫理的にどうなのかを考えるべきかを考えていきたい。
- 技術が進みすぎて、社会が進歩に追いついていない気がした。生と死について考えていると、何か、人間についてもう一度考えるべきな気がした。

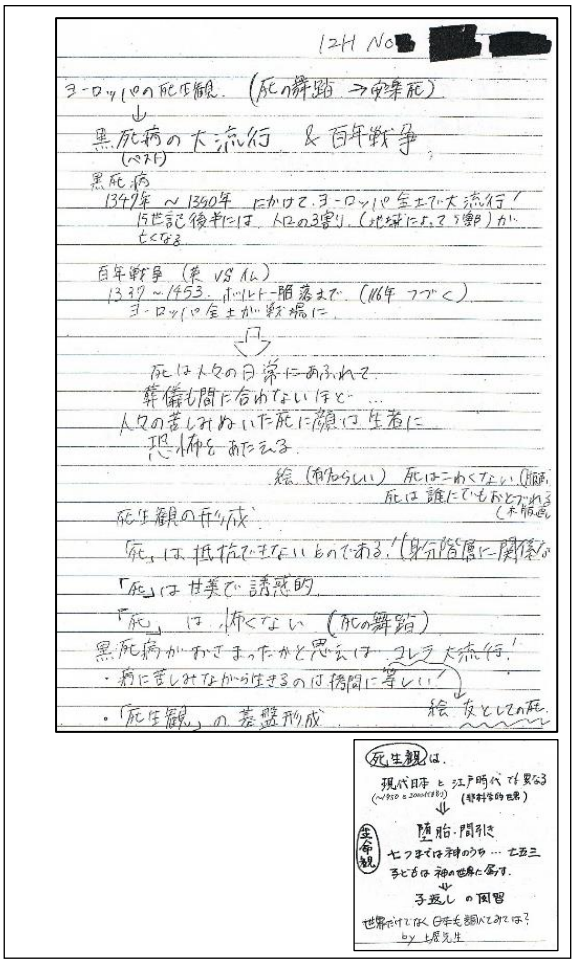
【資料４】

教師間の振り返り

この頃から、授業の反応がどうだったという教師側の感覚だけではなく、授業中の生徒の発言や生徒の振り返りの言葉の一つ一つを丁寧に確認するようになった。例えば、資料４の「生と死について考えていると、何か、人間についてもう一度考えるべきな気がした。」という意見について共有した時、「確かに、技術の進歩による生命観の揺らぎを見ていると、そもそも人間ってどんな生き物なのかをもう一度考えてみたくなる」と、私たち教師も同感であると話し合った。その話し合いから、次の青年期を扱う際には、まずは、人間とは何か？を見つめてから掘り下げていく方が良いのではないかと話し合った。このような生徒の振り返りの言葉の一つ一つを丁寧に確認することで、他クラスの生徒の学びの実態も共有できるようになっていった。

生命倫理の授業を終えて数日後、資料４の「出生前診断の所では、生と死はかけ離れているように見えて実は近いものなんだと思った。」という振り返りを書いた生徒が、私に一枚の紙を見せてくれた。（資料５）彼女は、なぜ安楽死が海外では認められているのか？という問いから、ヨーロッパの死生観に興味関心を持ち、自分でインターネットを使って調べてきた。つまり、その紙には、彼女が歴史的側面から、ヨーロッパでの「死生観」はどのように定着してきたのかをまとめたものだった。このまとめた紙を生徒から借り、他の担当教員にも見せて共に喜んだことを今でも覚えている。なぜなら、授業後に興味関心を持ったことを自分自身で調べ、深めていこうという姿が見られたからだ。

教師間で、このような生徒を授業で育てたいと話し合った。また、授業で完結ではなく、疑問点を生み出せる授業にも価値があるのではないかとも話し合った。私は、教員Ａに、あえてコメントを書いてもらった。その後、私から本生徒に「教員Ａにコメントを書いてもらったよ」と手渡すと嬉しそうにして、「また調べてみます！」と言った表情が今でも忘れられない。一つのクラスの学びを数人の教師で見守り育てる。それは、教師が、つながって「協働」しているからこそできる生徒への関わり方ではないか。



【資料５】

(5) 授業実践⑥

単元　　：現代社会と人間としての在り方生き方、青年期と自己の形成

ねらい　：生涯における青年期の意義を理解させ、自己実現と職業生活、社会参加、伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。

授業内容：青年期を生きる私を見つめるために、まず、人間とは何かを考えることで、現代に生きる青年期の生き方について考察する。

青年期の課題を深く考えるために、青年期の前に人間とは何かを考えることにした。それは、前回の授業の生徒の振り返りの中で、「技術進歩による生命観の揺らぎを考えていたら、人間についてもう一度考えるべきだと感じた」という意見を単元の導入に取り入れることにした。また前時で「生」と「死」に向き合ってきたからこそ、本単元ではどう生きるかも考えさせたかった。

授業では、1977 年アメリカから宇宙へ飛び立った 2 機の探査機の話からスタートした。2 機の探査機には、地球の様々な情景や音が記録されており、もし宇宙人と出会った時にその情報を通じて地球、人間について伝えられるようにしている。そこで、人間とは何か？を考える際に、「あなたが地球外生命体と出会ったら人間という生き物をどのような生き物だと説明するのか？」を考えさせることにした。そして、生徒が出した答えに対して、石黒浩大阪大学教授が作成した人間の特徴をもつ「喋る」、「笑う」マツコロイド（アンドロイド）の動画を見せて、人間とは何かを考察した。本授業では、人間とは何かを見つめた後、青年期の特徴やマズローの欲求階層説や無意識に行っている防衛機制から自分自身を見つめていけるようにした。

（以下、授業後の生徒の振り返り抜粋）

・はじめ、人間とは何かを考えたときに、喋れる。コミュニケーションが取れるとか思ったけど、マツコロイドを見て、恐ろしくなった。人間って、私って何？

・もう、あんなアンドロイドの映像を見ると違いなんてないとまで思った。また、石黒教授

の言っていた「人間とは何か？を知りたくてアンドロイドの開発をし、人間しかできないことを探しているというフレーズが印象的であった。」私にしかできないことって…
・人間にしかできないことは、神を信じること？信仰心ですかね。だから、宗教とかはいつの時代もどこでも見られるのか？
・人間にしかできないことは、苦しむことですかね。そう思うと今青年期で、様々な悩みや苦しいことがあることも人間らしいのかも知れません。
・マズローの欲求階層説を見て自分は自尊心も人からの目もすごく気にしていると思った。これが自分だと捉えられる時が、自分の得意なことで褒められている時だから、不安定になりやすいんだと思った。

【資料 6】

教師の振り返り

この単元が終わる頃、次の授業案に対して先生方から「どう思いますか？」と具体的な授業案を持ち寄って話し合うことが多くなってきた。そこで、私たちが常識として受け入れている考え方を吟味する楽しさを授業に取り入れるともっと、生徒は揺さぶられるのではないかと話し合った。例えば独裁政治＝悪、民主政治＝善と抱きやすいが、それは真実なのか？様々な場面や決める内容を通して吟味する。また生徒たちが物事を決める際に行っている多数決は万能なのか？を事例を基に考えることもいいのではないかと、具体的な案を基に話し合って、授業案を作り上げた。

(6) 授業実践⑦

単元　：現代の民主主義と政治参加の意義
目標　：民主政治の成り立ちと国家の在り方について、その背景や特質を理解し、民主社会に生きる人間としての望ましい在り方生き方について考察する。
授業内容：高等学校で学ぶ政治分野の初めての単元である。まずは「政治とは何か？」を考えた後に、国家の理想的な治め方に対して、中学校で学んできた直接民主制、間接民主制、独裁制などに対するイメージを活用し、そのイメージを揺さぶる問いを投げかけることで吟味する。また、民主主義の決定方法である「多数決」の危うさについても考察する。

政治分野での初の単元の授業のため、そもそも「政治とは何か？」を生徒に投げかけた。生徒は「国の方針を決めること」、「人々をまとめること」など多くの意見をつぶやいてくれた。そこで、私は、園児がブランコの前で、列を作り順番を待つ写真を見せた。そして私が「これが政治です。」と答えた。生徒は、不思議そうな顔をしていたが、次の説明をすると納得する生徒も出てきた。政治とは、考え方の相違や利害対立などを調整して争いのない社会を実現する働きである。「政治」を確認した後に、中学生で学んできた直接民主制、間接民主制、独裁制に対するイメージを活用しながら吟味していくことにした。あなたは、この 3 つの国の治め方の中で、良いと考えられるものはどれかと投げかけた。多くの生徒は、間接民主制と答えていた。それは、「今の日本も間接民主制でおおきな衝突を生んでいない」や「ある程度の色々な意見が生まれるため、不安定にもならず、間違った一つの意見で進むことにもならないから」などの意見が出た。全体で確認すると間接民主制、直接民主制の意見でほぼ全クラスの意見が占められていた。そこで、「独裁制は？」と投げかけると、「絶対良くない」」、「ナチスドイツのイメージで良くない」、「腐敗の匂いがする」など意見があがる。「じゃあ、なぜ過去に独裁制は登場してきたのか？」と投げかけた。「時と場合による」と生徒が言った。「それは、どういうこと？」と聞くと、「物事がうまく進まないとか、

皆で話し合っていても、ゴチャゴチャしている時などに、進めるためには必要になるのではないか」と答えてくれた。そこで、皆に「どんな時、独裁制が望まれるのかを考えてみて？」と投げかけた。生徒のつぶやきから、ナチスドイツの例を用いて、国内が混乱状態の時と答える生徒や部活動で試合に出る選手を決める時など身近な事例を用いて説明してくれる生徒もいた。また、民主主義の決定方法である『多数決』は、本当に民意を反映できるのか？を以下の事例をもとに考えた。

クラスで遠足に行く場所を決めることになった。クラスは 40 人いて大多数はインドア派です。投票では「遊園地 15 票」、「水族館 10 票」、「博物館 8 票」、「美術館 5 票」になった。この結果、クラスの遠足は遊園地に行くことになった。

【資料 7】

生徒のつぶやきから「結果的には、大多数の人が望んでいないものに決まる可能性もある」「少数意見が反映されにくいので少数派が不当な不利益を受ける」等の多数決の危うさに気付いている生徒が多くいた。また、授業後、選挙等の時も同じようなことが起こるのではないかと話している生徒がいた。(以下、授業後の生徒の振り返り抜粋)

・決める内容や決めるまでの時間で直接民主制、間接民主制、独裁制のどれがいいか変わってしまうことに気が付いた。 ・独裁制はヒトラーのイメージだったから絶対ダメだと思っていたけど、場合によっては独裁制が、混乱を落ち着かせる時もあるということに納得したのと同時に、その危険性も感じた。 ・場合によって人の考えは変わることに気付きました。 ・多数決を取るときに、意見がいくつも分かれるとその物事の中心となる部分の賛成・反対とは結果が異なることもあるのだなと思った。

【資料 8】

教師の振り返り

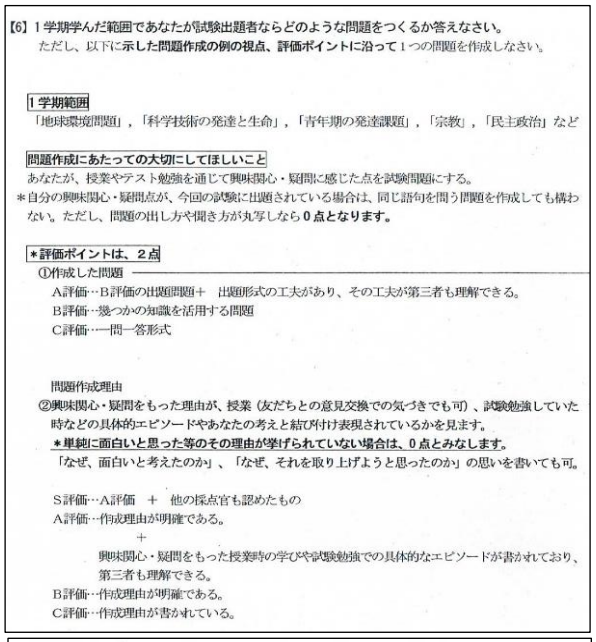
授業での反応や生徒の振り返りから、生徒が既に持つイメージを活用し、そのイメージは正しいのか、絶対なのか等を様々な角度から質問を投げかけて「吟味」することは、興味関心を持ちやすい問いになると先生方と共有した。

(7) 定期試験作り

現代社会の初めての定期試験（1学期期末試験）が近づいてきた頃、どのような試験を作成するのかを皆で話し合っていた。「ここまで、話し合って授業をやってきたのに、ワーク丸暗記でできる試験にしたら意味がない」や「暗記だけが大切ではないということを感じさせたい」等の意見が出た。私は、この話し合いの中で定期試験は、今までの学びを確認する場であると同時に、教師が生徒に授業で何を大切にして欲しいのか、学びの捉え方や姿勢を示すものではないかと話し合いから感じ取り、皆で共有した。私も皆で話し合い、協働して、創り上げた授業を今まで通りの全て丸暗記でできるような試験にしたくはなかった。小論文のような形にするのか等、悩んでいた時に以前の話し合いで気になった言葉を思い出した。それは、興味関心という評価を提出物や授業中の発言、振り返りだけではなく試験でも見取ることができないのか。地歴公民科にとって、興味関心は非常に重要な観点ではないかということだった。生徒が授業を通じて何に興味関心をもったのか。それはなぜなのかを言語化させるものがあっても良いのではないかと考えた。このような試験案を先生方に提案すると評価をどうするべきかと悩んだが、資料 9 の試験問題に挑戦することになった。最大の課題であった評価は、必要最低限を問題用紙で生徒に示して、採点時には担当の先生で集まり、話し合いをしながら採点することになった。

教師の振り返り

採点の時には担当者 3 人が集まり、生徒が作成した問題の質やどこに興味関心を持っていたのかを話し合うことができた。また、意外と教師が力を入れて説明した所には、興味関心を示さず、自宅で勉強していた時や授業での友だちとの意見交換時に興味関心を抱き、資料集で調べているなど、普段見えにくい部分が視覚化され、この採点を通じて生徒の学びのプロセスがわかった。それと同時に自分自身の授業実践も振り返ることができた。(以下、作成した定期試験)



【6】1学期学んだ範囲であなたが試験出題者ならどのような問題をつくるか答えなさい。
ただし、以下に示した問題作成の例の視点、評価ポイントに沿って1つの問題を作成しなさい。

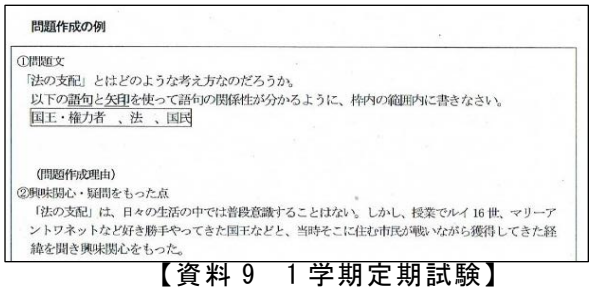
1学期範囲
「地球環境問題」,「科学技術の発達と生命」,「青年期の発達課題」,「宗教」,「民主政治」など

問題作成にあたっての大切にしてほしいこと
あなたが、授業やテスト勉強を通じて興味関心・疑問に感じた点を試験問題にする。
＊自分の興味関心・疑問点が、今回の試験に出題されている場合は、同じ語句を問う問題を作成しても構わない。ただし、問題の出し方や聞き方が丸写しなら0点となります。

＊評価ポイントは、2点
①作成した問題
A評価…B評価の出題問題＋　出題形式の工夫があり、その工夫が第三者も理解できる。
B評価…幾つかの知識を活用する問題
C評価……一問一答形式

問題作成理由
②興味関心・疑問をもった理由が、授業（友だちとの意見交換での気づきでも可）、試験勉強していた時などの具体的エピソードやあなたの考えと結び付け表現されているかを見ます。
＊単純に面白いと思った等のその理由が挙げられていない場合は、0点とみなします。
「なぜ、面白いと考えたのか」、「なぜ、それを取り上げようと思ったのか」の思いを書いても可。

S評価…A評価　＋　他の採点官も認めたもの
A評価…作成理由が明確である。
＋
興味関心・疑問をもった授業時の学びや試験勉強での具体的なエピソードが書かれており、第三者も理解できる。
B評価…作成理由が明確である。
C評価…作成理由が書かれている。



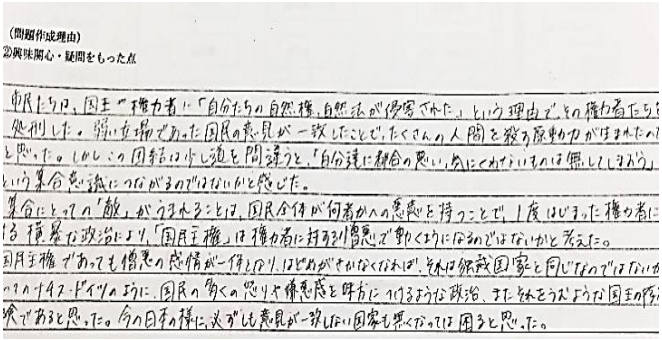
問題作成の例

①問題文
「法の支配」とはどのような考え方なのだろうか。
以下の語句と矢印を使って語句の関係性が分かるように、枠内の範囲内に書きなさい。
国王・権力者　、法　、国民

(問題作成理由)
②興味関心・疑問をもった点
「法の支配」は、日々の生活の中では普段意識することはない。しかし、授業でルイ16世、マリーアントワネットなど好き勝手やってきた国王などと、当時そこに住む市民が戦いながら獲得してきた経緯を聞き興味関心をもった。

【資料９　１学期定期試験】

(以下、生徒自身が興味関心をもった点の事例)



(問題作成理由)
②興味関心・疑問をもった点

市民たちは、国王や権力者に「自分たちの自然権、自然法が侵害された」という理由でその権力者たちを処刑した。弱い立場であった国民の意見が一致したことでたくさんの人間を殺す原動力がはぐくまれたのと思った。しかしこの団結は少し道を間違うと、「自分達に賛成の思い、あにくみないものは無視してしまう」という集合意識につながるのではないかと感じた。
集合にとっての「敵」がうまれることは、国民全体が何者かへの悪意を持つことで、1度はじまった権力者に対する積極的な政治により、「国民主権」は権力者に対する悪意で動くようになるのではないかと考えた。
国民主権であっても悪意の感情が一体となり、はじめがさかなくなれば、それは絶対国家と同じなのではないかとナチスドイツのように、国民の多くの思いが悪意感を味方につけるような政治、またそれをうばうような国王の陰険であると思った。今の日本の様に、災がしも意見が一致しない国家も悪くなっては困ると思った。

【写真１】

写真１のように、生徒の中には、授業で学んだ社会的事象を歴史的な視点で捉えたり、現代の社会で当てはめて考えてみたり、多面的に捉え且つ私たちは、どうすべきかまで書いている生徒もいた。新しい試験問題に挑戦したからこそ、今まで気づけなかった生徒の学びのプロセスを先生方全員で見取ることができた。

4.「協働」を取り入れた授業実践の省察

(1)担当教員へのアクティブインタビューの内容と考察

私は、「現代社会」を担当してきた先生方と「協働」を取り入れた授業実践についての振り返りを、1 学期末に行った。そこでは、決まった項目を一方的に聞きとるのではなく、自然な流れでの会話を通したインタビューを行った。以下、アクティブインタビューと呼ぶ。また、以下のコメントは、アクティブインタビューの抜粋とそのコメントに対する私の考察である。

①A（20 代講師）

（以下、アクティブインタビュー　一部抜粋）

・今までは教科会では上面の話しばかりで授業をどうするかなんて話はなかった。今の皆で集まり、そして声を掛け合い議論し合う形の話し合いは、授業でこうしようという強い縛りを決めるのではなく、オープンエンドで終わってくれるのもありがたい。授業作りの議論で出てきたいくつかのアイディアを最後自分が選択できるのが助かっているし、授業作りのアイディアになっているし、面白いと思っています。

・皆さんでの話し合いをふり返ってみると、今まで授業での目標や目指すべき方向性を共有し掲げてきた。それに向かってどう登っていくかを考え、日々の話し合いをヒントにしながら登ってきた感じだった。目標までの道のりは一本の線ではなく、点線で、どうやって登っていくか右に行ったり、左に行ったりしながら登ってきた。それが楽しかった。

・あと、皆さんとの話し合いと生徒との休み時間での雑談が授業創りの参考になった。

【資料 10】

私自身の中で、感覚的にあったものを言語化し、表現してくれたことで意識化できた部分があった。それは、資料 10 の中で出てくる「今までの話し合いで、目標や目指すべき方向性を共有し掲げてきた。それに向かって、自分はどう登っていくかを考え、日々の話し合いをヒントにしながら登ってきた感じだった。目標や目指すべき所までの道のりは一本の線ではなく、点線でどうやって登っていくか右に行ったり、左に行ったりしながら登ってきた感じで、楽しかった。」と言う部分からである。授業創りにおいて、正解はないのであろう。目の前の生徒の反応を確認しながら、私自身も試行錯誤していたのではないか。それは、一本の線で描けるほど単純なものではなく、仲間とも試行錯誤しながら歩んできたからこそ「点線」と言う表現が、私自身にも腑に落ちる言葉となった。

しかし、彼の「生徒との休み時間からの雑談が授業創りの参考になった」という言葉に対して、授業の時だけが授業創りのヒントではないことに気付かせてもらった。教師と生徒が授業に比べて、より話しやすい、休み時間での対話も大切だと再確認させてもらった。

②B 教諭（40 代）

（以下、アクティブインタビュー　一部抜粋）

・現代社会の科目や地歴公民科目の話しをすることで、教科の本質や生徒にどんな力を身につけさせればいいのかを再び見つめ直せた。今までは汎用的な力を身につけさせられるように考え実践してきたのかも知れない。けど、皆で話し合う中で、地歴公民の各々の科目の学ぶべき本質は何なのかと毎回考えさせられ、自分自身の実践を振り返っている。結構、楽しいようで辛くもある。。。。

・皆での話し合いで、「問い」について何度も考えることになった。自分自身の問いは、なぜ生徒は飛びつかないのか。逆に授業中に生徒とちょっとしたやり取りをしている時に、「これ何ですか？」ってつぶやいてくれることに答えたときの方が生徒は興味関心を持って聞いてくれるなと感じている。

【資料 11】

私の考察

私自身が、考えていたことを同じように考えていたことが、アクティブインタビューを通じて分かった。しかし、私は科目の学ぶべき本質は何なのか？と言うよりも、目の前の生徒たちが、教師も含めて、もっと主体的に対話的に授業が展開するためにはと言う視点で考えていたのかもしれない。ただし、そのような授業を実現しようとすると、自然な流れで、この科目「現代社会」の学ぶべき本質的な目標は何なのかと考えていくことになったのではないかと考える。また、生徒のつぶやきが授業創りに大きなヒントをくれると再確認できた。

Ⅲ　全体考察

本実践研究では、教師間での「協働」を取り入れた授業実践を行ってきた。「協働」するために考えた第一の「振り返り」、第二の振り返りで出てきた悩みや疑問点等を「話し合い」、共有することで悩みや疑問点だけでなく、授業創りに関する意見も出るようになり、「学び合う場」になったのではないか。つまり、協働の価値を体験できたのではないかと考える。協働とは「異なる背景を持つ者が、共通の目標に向かう際に自分の思いや考え（価値観）を伝えあい、お互いの考え方や行動にも大きな影響を与え成長できる活動」と定義した。このことが、アクティブインタビューの抜粋からも見受けられるのではないか。私もこの「学び合える場」でより良い授業とは何かを求め、お互いの教育観にも触れながら、そして尊重し日々の実践を振り返る中で、新たなる視点に気付き、次はこんな

実践をしてみようと描き続けることができた。このループが現在、高等学校でのキーワードになっている「探究」のヒントになるのかもしれない。また、学び合いの場での「振り返り」で、様々な議論を重ねることができたことも大きな財産である。例えば、「分かりやすい授業とは？」に関して、それは、本当に生徒の力を育てていると言えるのか、また、生徒が授業の課題に対して自分事と捉えさせるためには、どのようなステップを踏ませながら向き合わせていくのが良いのかや、生徒が興味関心を持ちやすい問いの立て方など多くの再確認や新たなる気付きをもたらしてくれた。

定期試験作りでは、評価の部分で多くの改善点はあるが、この取り組みによって、生徒がどこに興味関心をもっているのか、また、それはなぜなのか、そして、その事についてどう考えているのか等、普段は見えにくい部分が視覚化され、生徒の興味関心や学びのプロセスが視覚されたのと同時に、私たち教師の授業実践も振り返ることになった。

V　おわりに

授業創り、そしてその実践方法に正解はない。しかし、教員同士が授業後の「振り返り」を通じた「協働」を取り入れることが大きな可能性を秘めていると確信している。そして、教師間だけにとどまることなく、生徒も一緒に「協働」することで可能性は更にひろがっていくであろう。私は、教師間というのを意識してきたが、もっと大切な目の前の「生徒」と、そして多くの「先生方」と「協働」することが、大切なのではないかと気付くことできた。このつながりを持った「協働」を実践することができれば、学校全体の学び自体も大きく変える可能性を秘めているのではないかと考えるようになった。私は、更に生徒と教師が「協働」する体験を持ちたいと考え、2018 年 9 月 17 日の第 2 回金沢大学高大接続ラウンドテーブルに同一教科及び他教科の先生や生徒と一緒に参加してきた。これからも、生徒や多くの先生方と「協働」し、学校が生徒や教師にとって、成長できる場になるよう出来ることから取り組んでいきたい。

【写真 2 金沢大学高大接続ラウンドテーブル】

引用文献・参考文献

1)池田守男・金井壽宏（2012)「サーバント・リーダーシップ入門」.かんき出版

2)ホルスタイン,ジェイムズ・グブリアム,ジェイバー(2009)「アクティブ・インタビュー　相互行為としての社会調査」山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳,せりか書房

3)文部科学省(2018)「新高等学校学習指導要領について」

4)河原和之「多数決」から民主主義の見方・教え方を鍛える」『社会科教育』(2018 年 7 月号)

5)大杉英昭編著(2010)「高等学校　新学習指導要領の展開　公民科編」明治図書.

6)坂本旬（2008)「協働学習とは何か」
http://hdl.handle.net/10114/6703
(2019/01/08)

7)金子奨・高井良健一・木村優(2018)「協働の学びが変えた学校　新座高校　学校改革 10 年」大月書店.